
竜の英雄

糸冬始

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

竜の英雄

【Zコード】

N6837Z

【作者名】

糸冬始

【あらすじ】

長い寿命と蓄えた英知、強大な魔力と頑強な身体を持つ生き物、竜。あるとき、オステイリア皇国第四皇子が竜を倒す者、竜の英雄として旅立つこととなつた。

同國、後日。人里離れた森で、一人の青年が行き倒れた少年を見つける。風の噂に聞く第四皇子に良く似た少年と、竜の卵を盗んだお尋ね者に良く似た青年。追われたり隠れたり戦つたり、訳ありの二人の珍道中。

竜。

世界に古くからある強大な生き物。

長い寿命と蓄えた英知、強大な魔力と頑強な身体を持ち、人が住む事のできない峡谷に巢食うという。まれに人里に現れては家畜を襲い、金銀財宝を奪つて蓄えるとも。若い娘の血肉が何よりの好物で、浚つて食べるとも。

人間には到底敵わない、世界の絶対強者。

しかし竜の鱗は鋼よりも硬くしなやかで、その血肉は不老不死の妙薬だという。そのため、どれほどの犠牲を払つてでも手に入れようとする者も多い。角の先から尾の終わりまで、残さず利用価値があるのだ。

また、竜を欲しがる者も居れば、竜を倒すことそのものを目的とする者も居る。腕に覚えのある者は皆、絶対的強者である竜を屠り人々の英雄となる夢を見る。小さな竜を倒しただけでも、一生遊んで暮らせる褒賞と多くの人からの羨望が得られるのだ。

竜を倒した偉大な者。

人々はその者を、畏敬の念を持つてこう呼ぶ。

竜の英雄、と。

* * *

「くそつ、あンの馬鹿兄どもめええ……」

恨み辛みのこもった言葉が、深夜人気のない森の片隅で呴かれた。そのまま声の持ち主が息絶えたらさぞ見事な怨霊になるだろう、と思わせるような怒氣の入りようだ。もつとも、その想像はすぐに実

現しそうな状況だったが。

年のころは十五、六。幼さの残る顔立ちは、いまだ少年と呼び表しても通じるであろう。明るい茶色の髪は薄汚れて輝きを失い、白い肌も汚れでくすんでいる。元は高級であろう衣服も汗や泥に塗れて、もはや貧民街の孤児に紛れても違和感を感じさせない身なりとなっていた。

そして脇腹には、刺されたような傷跡。じわじわと鮮やかな赤が広がり、もとより白い肌が蒼白になつていぐ。あと十数分もすれば事切れるか、獣に嗅ぎ付けられてメインディッシュとなるかだろう。どこをとっても、そう遠くない未来に怨靈と化すと思わせる。

「死ん、で……たまるか……」

ただ一つ、ぎらぎらと輝く青い目を除いては。

澄んだ蒼穹がガラス玉に収められたような、目を惹きつける青色。それは、とても死に逝く者の目とは思えぬ輝きを放っていた。死んでたまるか。

再び少年の唇が動いたが、先ほどの言葉よりもずっと微かに吐き出された。出血の所為で意識もおぼつかないのだろう、視線も定まらない。が、それでもぎらぎらとした輝きは消えず、いつそ不気味なほどの生への執着だった。

暗闇の中、木々のざわめきと少年の息の音だけが静寂を妨げる。ぼろきれの様な薄汚れたクローケに包まれ、少年はただ息をしていた。

と、息が乱れた。風が枝を揺らすものとは違う、もっと質量を持つものの音が聞こえてきたのだ。

がさがさ。下草をかき分ける音が近づいてきていた。獣か、夜盗か。どちらにしろ、人里離れた森で行き倒れた時点でのこうなることは予測していた。ただ認めたくなかった。

近づいてくる音は、獣にしてはやや大きい。では夜盗か。慰み者にはなりたくないが、とだけ思い、少年の意識は急速に闇に落ちていった。

闇に落ちる中で、歌つよつな口笛が聞こえた気がした。

〇〇・ある森の出来事（後書き）

読んでいただきありがとうございました。
感想・批評、誤字・脱字報告、うかつけています。よろしくお願
いします。

01・押し売りの取引

ぼんやりとまどろむ闇の中で、少年の意識は緩やかに覚醒した。誰かが自分の怪我の看病をしていた、ような。そんな都合の良い夢をいつまでも見てられないと思い、少年は目を覚ました。

「……つて、あ？」

知らない天井に、少年は間抜けな声を上げた。てっきり奴隸にされてどこかに捕まっているか、あの世で目を覚ますと思ったのだが。咄嗟に自分の身体を確かめるが、拘束具の類はないようだ。びしるか丁寧に手当てされている。

「あれ……夢じゃなかつたのか」

助けられたような、記憶はある。が、余りにも都合の良いことだつたため夢だと思った。見るからに怪しい自分を助ける醉狂な者がいるとは。第一、あんな人里から遠く離れた森の中で深夜に人が通りかかるなんて。

運が良かつたのか、それとも何か裏があるのか。

「……ちつ」

裏がある、と咄嗟に判断したのは、今までの生活の賜物か。自分の思考回路が嫌になるが、そうでもしないと生き残れなかつたのも事実だ。状況が怪しそうもある。あんなところで倒れていた自分が言うのもなんだが、この状況はおかしいのだから。

ちら、と視線を走らせ状況を確かめる。質素なベッドに布団、机と椅子が一つずつ、棚は小さなものが二つ、簡素なキッチンとその奥に窓が一つ。部屋が一つしかない山小屋か何か、といったところか。小屋自体も含め、どれもこれも手の入つたあとがある。素人の補修なのだろう、机が若干傾いている。

「一人暮らし、か……？ 生活感のない家だな」

窓の外には木々が見え、口笛のような鳴き声が聞こえる。あの森の中できおり耳にした音だ。小鳥か何かだろう、とあてをつけ、

考える。どうやら街に運ばれたわけではなく、まだ森の中のようだ。武器になるものは手元になく、手当てられているとはいえた重傷。

少年は嘆息し天井を見上げた。

「なるようになれ、だな。どうにもできねー」

「気がついたばかりなのに、随分おしゃべりだね」

「つ！」

声の方に視線をやる。と、クローケを羽織った青年が小屋に入ってきた。手に抱えた袋から薬草がはみ出している。フードの下の顔はどこか見覚えのあるような平凡な顔立ちだ。焦げ茶の髪に、若葉のような緑の目。農村で働いていそうな外見は、この状況にあまりにもそぐわない。

青年はくすくす、と人のよさそうな笑みを浮かべて少年を見た。

「うん、怪我は大丈夫そうだね。一応、包帯を替えたほうが良いかな」

「……あんた、誰？」

「話は怪我を診ながらできるだらう？ 脱がすよ」

青年は躊躇うことなく少年の服をはいでいく。普通、同性とはいえ躊躇するものだと思うが。手当てされた跡もあるので今更か、と思いつつ直してされるがままになる。

赤黒く染まつた包帯が取り替えられていくのを眺めながら、青年に質問を投げかける。

「で、あんた誰？」

「名前はティル。森で行き倒れていた君を運んで手当てした。こんなところで良い？」

「……一人暮らし？」

「『』想像にお任せするよ」

「医者なのか？ 手馴れてるみたいだけど」

「まあ、医者の真似事は良くやっているからね。薬草を売つて生計を立ててる。あ、薬塗るから、ちょっと沁みるよ」

「…………つー」

脇腹に走る刺激に、思わず悲鳴を漏らす。ティルは変わらず笑みを浮かべたまま手当てを続ける。どうやら、痛みを気遣う心は持ち合わせていないようだ。柔軟な笑みを浮かべるくせに、行動に人のことを考えている感じがしない。

包帯を巻きなおしたところで、ティルは椅子をベッドに寄せてさて、と口を開いた。

「それじゃ、そろそろ名前を聞いても良い?」

「あ? あー……」

もしかして、探っていたのか。手当てをさせるかどうかで、警戒の度合いを確かめていた。人のことを考えている様子は見られないのに、妙なところで間合いを計っているような。

「えっと、俺はジーク。……助けてくれて、ありがとう」

「どういたしまして。怪我が治るまではゆっくりしていきなよ」「いいのか?」

ジークの言葉に、ティルはきょとんと瞬いた。年上だと思われるが、妙に仕草が子供っぽい。言葉が足りなかつたか、ヒジークは改めて言い直した。

「いや、だから……こんな怪しい人間、家においといても良いのかつてこと」

「自分でそうこう」と言つ?」「うう……

「自覚してるから言つてるんじゃねーか。どうなんだ?」

ティルは悩むように視線をさまよわせ、しばしして口を開いた。

「君を助けたのにはいくつか理由があるんだ。まず第一に、おれは昔行き倒れたところを助けられて一命をとりとめたことがある。だから他人事には思えなくてね、行き倒れは助けることにしているんだ」「へえ……」

妙に親切なのは、自分が親切にされた経験があるから。理由として強くはないが、しかし納得の出来る理屈は通つている。ぽかしてはいるが、嘘という感じはしない。

「それじゃ、第一の理由は何だ?」

「君の顔。…………ああ、安心して、衆道つてわけじゃないから」

思い切り引いたジークに、ティルが付け加えるように言つ。慰み者にする氣で助けたのか、とジークの想像が嫌な方に進んだのだ。

尤も、ティルの言い方が悪いのだが。

ティルはじつくりとジークを眺め、再び口を開いた。

「日に透かすと金にも見える茶髪、澄んだ空のような青い目。年は數えで16歳、でももう少し幼く見える。薄汚れてはいたものとても質の良い身なりをしていた。……何かを、思い出すよね」

ティルの言葉を黙つて聞き、ジークは冷静に見えますように祈つた。動搖を悟られてはいけない。それは肯定だ。

ジークの青い目を見つめ、ティルはにつこりと笑つていった。
「行方不明の竜の英雄、第四皇子のジークヴァルト様によく似ていないかい？」

一難去つて又一難、とジークは嘆息した。動搖を隠し、にへ、と笑う。

「……あー、うん、よく言われる。そつくりだろ？」

「そうだねえ。尋ね人の掲示の情報とそつくりだ。実物は知らないけど。ちなみにいくつ？」

「16歳。いやあ奇遇だなー」

「うんうん、凄い偶然もあるものだねー」

薄ら寒い会話だった。窓の外から聞こえる口笛のような音が朗らかにさえずつているが、空気は変わらず寒々しい。

ジークは横になつたまま、ティルを見上げた。にこにことした柔和な笑みに変化はないが、先ほどよりもずっと恐ろしく感じる。

「俺を衛兵に突き出してみる？ 褒賞もらえるかもな」

「いやあ、間違ついたら君に迷惑だし、怒られちゃうかもしけないじゃない？ 証拠もないしなあ」

「そりや正論」

正論過ぎて胡散くさ過ぎる。ジークは内心で呟いてティルの様子を窺うが、相変わらずの笑顔。ジークが寝ているうちに衛兵に突き

出さなかつたとこつことは、何か考えがあるのだらうが。

「なるほどね。じゃあ第三の理由は何なんだ？」

「あれ、まだあるって言つたっけ？」

「理由が一つしかないんだつたら、『いくつかある』なんて言い方しねえだろ」

ジークの言葉に、ティルは目を大きく見開いて領いた。やはりどこか抜けている感じがする。

「えつとね、なんていえば良いかな……おれに常識を教えて欲しいんだ」

「はあ？」

「おれ、凄く世間知らずで。ずっと田舎で育つたからよく分からないことも多いし。でも、ちょっと旅に出よつと思つてや、だから一般常識くらい身につけないとつて思つて」

「……それで、俺を助けた？」

「うん、まあ、恩を売ろうつと思つて？」

納得のいく言葉だつた。少なくとも、怪しい人間を助けた人の発言といふことを鑑みれば、十分に信用に足る言葉だらう。ただの好意としてではなく利益を考えての行動だつたのならなおさら。

ティルの言葉を聞き終わり、ジークはため息をついた。

「つか、もう手当てとかしてゐし……押し売りじやねーか

「ダメだつたら、これから活動資金として君を衛兵のところに連れて行くつもり」

「押し売りどころか脅しじやねーか！」

おおい、と思わず突つ込む。頭が痛い気がするが、怪我の所為だけではないだらう。ティルに手を差し出すと、ジークの手を見つめて困惑をあらわにした。本当に、常識がないようだ。ジークはひざの上に載せられていたティルの手を取り、ぎゅっと力を込めた。

「まあ、なんだ。これからしばらく、よろしく

「……うん、取引成立だ」

ジークはティルの気の抜けた笑みに笑い返し、これからの未来へ

の憂いを捨てた。
なるようになれ。
それだけだ。

01・押し売りの取引（後書き）

読んでいただきありがとうございます。
感想・批評、誤字・脱字報告、うけつけています。よろしくお願いします。

ティルに拾われ取引という名の脅しに屈して一ヶ月。ジークはティルの常識のなさに度肝を抜かれていた。

最初に気がついたのは、文字だ。何やらくねくねした模様が板に描いてある、と思つたら100年前に貴族が使つていた古代文字だつた。ジークはすらすらと読むことは出来なくとも、それが何かくらいまでは分かる。慌ててティルを問い合わせたところ、

「え、それ今使つてる文字じゃなかつたの？ 道理で見かけないと思つた」

と力の抜けた答えが返ってきた。

更には、出てきた貨幣が今はもう滅びた国の金貨であつたり、地名や国名の古い言い方しか知らなかつたり、ジークの持つていた最近の知識や道具にいちいち驚いたり。

ようするに、知識が全体的に古いのだ。ざつと50年から100年ほどは。

「ティル、お前一体何者なんだよ……」これもはや世間知らずとか言う問題じやねえよ

「そう？ まあ、だからこうして勉強しているわけだけど

ジークの言葉に首をかしげながら、ティルは手元の黒い板に白墨で書きとめていたことを見下ろした。紙やインクは高価だから、勉強でのメモなどは小さな板に書くのが普通だ。白い粉を払つて掃除すれば何度も使えるため、子供の書き取りによく使われる。

ティルの常識のなさに不安になつたため、急遽ジークが授業という形で教えることになつたのだ。分からぬことがあつたらその都度、訊けばいいだろう、というティルの意見は素早く却下された。その程度でなんとかなる問題ではなかつたのだ。

「えつと、ティル。次は何について知りたいんだっけ？」

「街で自活するためにはどうすればいいか、で……そつそつ、お金

についてだ

「ああ、お前の貨幣に対する知識は150年前で止まってるんだつたな……」

ジークはため息をつき、持つてている貨幣を机の上に並べた。

「貨幣は偽造が出来ないように、国ごとに特殊な加工を行つて責任もつて製造している。このオステイリア皇国でつかっているのは銅貨、銅貨、銀貨、金貨で、単位はオスト。外国に行けば単位は変わるが、おおよそこの四種類だ。流石に金貨と銀貨は持ち歩いてないからな、とりあえず実物は銅貨と銅貨な」

「金貨と銀貨は使わないのかい？」

ティルの素朴ともいえる疑問に、ジークはため息をついた。

「金貨は大きな街の領主が使うような金額が動くとき、銀貨は栄えた商人が金を動かすときに使う貨幣だ。平民が日常的に持つ金額じやねえよ。同じように言つなら銅貨は一般的な平民が売買で使う金額で、銅は端数だな」

つまりは、貨幣とは身分の現われなのである。金貨は貴族、銀貨は商人、銅貨や銅貨は平民。辺境の地であれば銀貨すら見たことがない人も珍しくはないし、田舎であれば貨幣を使わない物々交換がまだ流通している。

といふか実際、ティルは今まで物々交換で生計を立てていたため、貨幣の違いすら知らなかつたのだが。しかしどのつく田舎であればそういう人間もいるのだろう。

ジークの持つていた大きさが違う数種類の銅貨と銅貨を見て、ティルは首をかしげた。

「この、銅貨も銅貨も大きさが三種類あるけど、どう違うんだい？」

「銅貨は一番小さいのから順に1オルト銅貨、10オルト銅貨、25オルト銅貨。銅貨は一番下が100オルトで、同じ比率で上がっていく。まあ、端数なんて纏め買いとかするとまけてくれたりするけどな」

「生活の知恵をありがとう。それで、どれくらいの価値なんだい」

「ティルの価値観が良くわかんねえから迂闊なことはいえないが……そうだな、ティルの暮らしぶりだと、一皿三食で1000オルトつてところか」

「ふうん……」

こりこり、と白墨の削れる音が沈黙に落ちる。ティルの書き取りは全て古代文字のため、板がどこぞの遺跡の出土品ようになつているのがおかしかった。ジークはにやつきながら貨幣をしまい、授業を続ける。

「で、本題だな。金を稼ぐ方法について」

「うんうん」

「ティルは旅を続けながら金を稼ぎたい、んだよな？ それなら英雄組合を利用するのが手っ取り早い」

「英雄……組合？」

一つの言葉のアンバランスさに、ティルは微妙な顔をした。ジークもその気持ちは分かるので、強く頷く。

「正確には”竜の英雄候補者組合”。国に正式に認められていなくとも力を持った人間はいるだろ？ そういうつた人に下位竜や野獣退治の依頼をしたりできる斡旋所。そこで名を上げると国の偉い人の目に留まって、たまに”竜の英雄”が生まれる。だから”竜の英雄候補者組合”なんだ。組合加入者は基本的に候補者って呼ばれるな」

「ふうん、英雄、ね……」

英雄という言葉に、ティルの笑みが苦々しいものに変わった。何か嫌な思い出もあるのか、とも思うが、組合の人間には荒くれ者も多い。自称英雄の狼藉は田舎にもあるのだろう。

ジークも自称英雄には痛い目を見たことが何度がある。何せ自称するだけあって実力がある者も多いのだ。ジーク自身は組合に加入しているものの貧弱な部類であり、言い返そうにも返しにくい。子供じみた外見と相まって散々にからかわれたのは苦い思い出だ。

そんな苦い思い出を振り返りつつ、ジークは浮かない表情のティ

ルに話しかけた。

「まあ英雄組合って言つても退治の依頼ばかりじゃない。薬草の採取依頼とか、街中での手伝いとかもある。何でも屋みたいなもんだ」

「そう。薬草なら今でもやつてるし、なんとかなりそうかも」
ふむ、とティルは壁に吊るして乾燥させている薬草を見上げた。
全くいつも通り、ではないものの、先ほどまでの陰鬱とした影はない。ジークは内心で安堵の息をつき、話を続けた。

「加入のやり方は、またそのときに教えるよ。候補者である俺が保証人になるから、入会費も安くすむだろうし」

「ありがたいよ。ジークを助けて本当に良かつた」

「この程度の常識でありがたみが増す俺の命つて一体……」

ティルの言葉に、ジークはそつと脇腹を撫でた。一ヶ月もたてば、だいぶ怪我は塞がり回復している。が、どうも治りが早すぎる気もするのだ。早く治る分に不都合はないのだが、ティルの調合した薬の性能の高さに驚きが勝る。街で売れば価格の高騰は間違いないだろつ。

不思議なのは、その材料や調合法をどうやって手に入れたのかだ。良い薬を作るには当然貴重な材料を必要とするはずだが、この小屋でそんなものは見たことがない。調合法についても、ここまで世間でそれしたティルが誰かに師事していたとは到底思えない。

ちぐはぐしている。それがジークの感想だった。

大体、いくら田舎で育ったとはいえ知識が古すぎる。30年かそこらであれば、山間部の村などで生まれ育てばズレが起きることはある。しかしティルの場合は知識のズレが100年を超えるのだ。
いくらなんでもおかしい。

のんびりとした喋り方の、柔軟な笑顔の青年。ジークを助けた命の恩人。成り行きに流されて協力しているが、ティルが怪しいのは事実だ。

100年前の知識。古代王朝の金貨。材料も調合法も分からない薬。一体、どんな半生を送ってきたのだろうか。

「……はあ」

ジークはこいつそりとため息をつき、テイルを窺つた。が、相変わらず複雑怪奇な古代文字で真剣に書き取りをしている。いい加減、文字も覚えさせなければいけない。覚えるべき常識は山のようにある。

非常識だ。しかしそんな非常識に救われてジークは命を繋いだわけであつて。ジークはもう一度ため息をつき、テイルに向き直つた。常識についての授業は、まだまだ足りないようだ。

02・世間知らずへの常識授業（後書き）

読んでいただきありがとうございます。
感想・批評、誤字・脱字報告、うかづけています。よろしくお願
いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6837z/>

竜の英雄

2011年12月27日22時54分発行